

教員を目指す女子学生の進路選択に至る過程

三 上 彩 埼玉大学教育学部研究生
伏 見 葉 月 埼玉大学教育学部養護教諭養成課程(卒業生)
関 由起子 埼玉大学教育学部学校保健学講座

キーワード：教員養成、職業選択、女子学生、進路選択

1. はじめに

近年、若者の完全失業率や非正規雇用率の高さ、新卒者の就職内定率の低さ、若年無業者や早期離職者の存在など若者の就職状況が問題視されている。文部科学省調査によると、全年齢の失業率の平均が平成3年は2.1%、22年は5.1%、15歳から24歳までに限定すると4.5%、22年は9.4%であり、雇用状態の厳しさがうかがえる。その中でも新卒者の就職状況は厳しく、平成23年春の大学新卒者の就職率は91%であり、平成8年度の調査開始以降最低の水準となっている(文部科学省、2010b)。一方で、正規の従業員以外の就業形態で働く若者が増加している。15歳から24歳までの非正規雇用率は平成3年は9.3%であったのに対し、22年は31.7%と大幅に上昇している。35歳から44歳までの非正規雇用率の変化が、平成3年は20.1%、平成22年は26.3%であることを比較すると、非正規雇用が若年者において特に拡大していることがわかる(文部科学省、2010b)。さらに、女性就業者は近年様々な制度の整備が進む中で増加しているものの、一般的な性別役割分担意識や出産・育児等の影響で、正規雇用以外の雇用形態である者の比率が正規雇用の比率より多い(文部科学省、2010a)。また、女性の非正規雇用は有期雇用が多く、また、出産等により一定期間就業を中断した場合には、就職したいが雇用してもらえない、たとえ就業した場合でもパート・アルバイトしかみつからないという状況が見られている(文部科学省、2010a)。この状況は、出産・育児に伴うものだけでなく、未婚の女性においても近年強まる傾向にある。

このように若者や女性の雇用が不安定になっていることを背景に、女子高校生の大学選びでも就職率の良い大学、さらに資格を取得できる大学が目ざされている。国家資格が取得でき、かつ求人がある医療系の学部や(日本経済新聞社、2014)、文系では教員免許が取得できる教員養成系に人気が集まっている(河合塾、2010)。しかし教員養成大学に所属しながら実際教員として就職した卒業生は、全国で正規採用・臨時採用を含み61.6%と低い割合であり(文部科学省 高等教育局大学振興課教員養成企画室、2013)、約40%は教職以外の職に就いている。教員採用試験倍率は平成23年度選考のデータによると、小学校4.5倍、中学校7.8倍、高等学校7.7倍、養護教諭8.7倍、栄養教諭8.8倍(文部科学省 初等中等教育局教職員課専門官、2011)であり、非常に高い倍率が低い就職率の原因の一つである。しかし、教員の労働市場は他の職業にくらべて女性勤労者の割合が多く、育児休暇等の充実や、結婚・出産後の職場復帰が容易等の利点があり、生涯にわたって仕事を続けようとする女性にとっては非常に働きやすい環境(妹尾ら、2003)である。にもかかわらず、就職に有利と考え教員養成系大学に入学しながら、約40%もの学生が教員採用試験を受験せずに一般就職を選択する理由はなぜだろうか。

そのため本研究では教員養成系の学部で大学に在籍する女子学生が、自分自身の進路決定についてどのように葛藤し、進路選択にいたるのかを明らかにすることを目的とする。学生の進路決定の過程を明らかにすることは、進路選択に現に葛藤を抱いている学生への示唆になるほか、学生の職業意識の形成過程をとらえることで、大学における就職支援・指導に示唆を与えるものとして、意義あるものと考えられる。

2. 方法

2-1. 対象者

A大学教員養成学部で在籍する女子学生の中から理論的にサンプリングを行い、教員採用試験に対して葛藤を抱いていたとみられる学生16名（一般教員志望4名、養護教諭志望12名）を対象者として選択した。平成25年11月から12月にかけて半構造面接法による面接調査を研究者2名で行い、対象者の同意を得て面接録音した。インタビューは対象者の真の気持ちを聞き出すため、同大学の教員養成学部で在籍する4年生2名が行った。面接内容は「教員を目指す理由」、「教育実習での感触」、「先輩の教員採用試験の結果に関する感想」、「教員以外の進路の考え」である。面接時間は平均60±45分であった（表1参照）。

表1. 面接対象者の属性

	学年	教員採用試験 受験（意志）	進路（4年生のみ）
Aさん	4年	無	民間企業等就職
Bさん	4年	無	民間企業等就職
Cさん	4年	有	教員
Dさん	4年	有	教員
Eさん	4年	有	教員
Fさん	4年	有	教員
Gさん	4年	有	教員
Hさん	4年	有	教員
Iさん	4年	有	教員
Jさん	4年	有	大学院進学
Kさん	3年	有	
Lさん	3年	有	
Mさん	2年	有	
Nさん	2年	有	
Oさん	1年	有	
Pさん	1年	有	

2-2. 分析方法

データの分析は、木下（2007a, 2007b）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTAとする）を用いた。M-GTAの特徴は、研究対象が医療、教育、保育等ヒューマンサービス領域において、プロセスの特性をもつ現象を背景にもつテーマを分析することに適しているこ

とがある（木下、2007a）。本研究は大学教育の場にある女子学生が対象であること、テーマが学生の進路選択に至る過程であることからM-GTAを採用した。本研究の分析手続きは以下の通りである。

- ①録音データからトランスクリプトを作成した。
- ②最初に特徴のある一事例に着目し、分析テーマに関連する箇所（具体例）を文脈がわかる分量でトランスクリプトから抜き出し、概念名を与えた。
- ③他の事例から同様の方法で類似の具体例を抜き出した。
- ④解釈の恣意性を防ぐため、類似例、対極例があることを確認しつつ、概念名とその定義、具体例を分析ワークシートにまとめた。分析ワークシートとは、概念名、定義、具体例、対極例や分析の視点を書き留める理論的メモからなるもので、1概念につき1ワークシートの形式で作成した。
- ⑤分析ワークシートに照らしつつ、概念と概念の関わりを理論的メモを参考にしながら、検討を行いグループ化し、カテゴリーを生成した。
- ⑥カテゴリー及び概念の関わりやプロセスを図に表した。

2-3. 倫理的配慮

研究への参加は協力者の自由意志とした。研究参加依頼時および面接前後に参加の意思を確認し、研究者への連絡先を記載した研究説明書を参加協力者に渡し、研究中いつでも参加の取りやめができるように配慮した。得られた情報は研究の目的以外に使用しないこと、論文等で公表する場合は個人を特定できないようにすることを協力者に確約した。参加を取り辞めたい際には得られた情報はすべて破棄することを文章と口頭で説明し、研究参加同意書に署名をもって、研究参加同意書とした。

3. 結果

M-GTAによる分析を通して生成された3つの概念と5のカテゴリーとの関係を図1に示した。最初に、図に示した概念とカテゴリーの関係、すなわち教育学部の学生の進路決定プロセスの枠組みを説明する。なお、図上では概念を《 》、カテゴリーを〈 〉に示した。

3-1. 教育学部の学生の進路決定プロセスの概観

分析から得られたカテゴリーを中心に、女子学生の進路決定プロセスの枠組みを概観する。本研究対象の女子学生は、《教員を志す気持ち》の有無によって、教職を目指すか、一般就職を目指すかを選択していた。教育実習前に《教員を志す気持ち》がないことに気付いた学生は、早期に一般就職を決断していた。《教員を志す気持ち》がある学生は、その気持ちを確かなものにするために二段階の吟味を行っていた。それは《教育実習体験に基づく吟味》と《求職活動・雇用条件の吟味》である。《教育実習に基づく吟味》は〈教員への魅力〉、〈教員としての知識・技術への自信〉、〈教育観・学校組織への適応感〉から成り、これらの吟味によって《教員を志す気持ち》を確信していた。さらに〈就職活動の能否〉、〈教育公務員としての安定への魅力〉から成る《求職活動・雇用条件の吟味》を行い《教員を志す気持ち》をさらに確かなものへと形成していった。一方、これらの吟味により、教員を志さないと決めた場合は一般就職を目指していた。しかしある学生は

《教員を志す気持ち》が定まらないまま教員採用試験の受験を決定していた。また、どの段階においても、知識や技術のさらなる習得の必要性を感じた場合、大学院進学を希望する学生もいた。次にカテゴリーの詳細について述べていく。

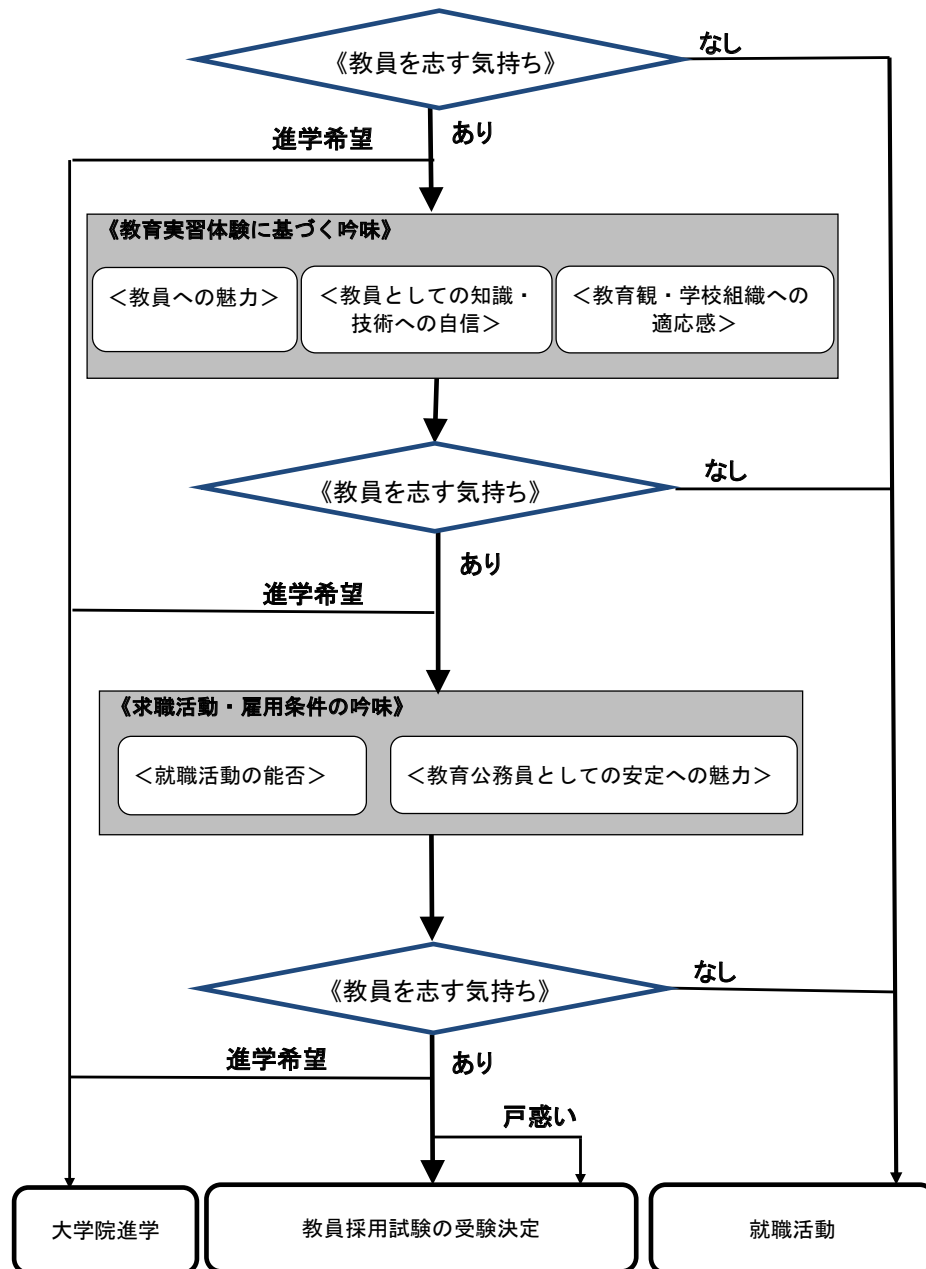


図1. 教員養成系学部的女子学生の進路決定プロセス

3-2. 教員を志す気持ち

教職を目指すか否かの重要な決定要因は《教員を志す気持ち》の有無であった。その気持ちの有無の判断として教員像の確立にあり、教職をあきらめた学生は「教員（養護教諭）としての像」が出来なかったと発言していた。

入学したときは養護教諭の像はできてなかったんだと思う。うーん。2年。いや、いまも。み

えてないからやりたくない、っていうか。できないっていうのもある。(Bさん 4年生 民間企業就職)

また、教員を志す気持ちが確立されなかった学生は、理想の教員像と現実の教員像のギャップを感じ、その結果自身のやりたいことが現実の教員像では実現できないと考え、他の進路を選択していた。

学んで養護教諭を見るのと、ただ普通に高校に通う生徒から養護教諭をみているのとは見方が違う。見る目がかわった、養護教諭に対する。うーん。(Aさん 4年生 民間企業等就職)

一方で、今まで抱いていた理想の教員像と実習先で感じた現実の教員像のギャップを感じた場合でも、教職を目指すことに確信が持てた学生はそのギャップを受け止め、新たな教員像を確立していた。さらに、現実の教員像を受け入れた上で、教員になって何をしたいのかを明確に考え始める学生もいた。

理想が変わった。たぶん、より現実的になった気がする。健康問題とか。1年のときは今の子どもがどういう状況にあるのか、ざっくりじゃない。そのなんかほんとざっくりした気持ちでしかない。テレビとかお母さんから聞いた話とか、実際自分の目でみて思って聞いてっていうからみてる健康問題は全然違う。なんていうの？ちゃんと見据えてる？うーん。養護教諭になってなにをしたいのか、っていうのは1年のときから比べると、圧倒的に考えてるから…差はあるよ！(Eさん 4年生 教員)

3-3. 教育実習体験に基づく吟味

教育実習での体験は《教員を志す気持ち》の確立に大きく影響していた。この《教育実習体験に基づく吟味》は、〈教員への魅力〉、〈教員としての知識・技術への自信〉、〈教育観・学級組織への適応感〉の3つの概念から構成されており、教育実習の負の経験はおおむね教員を志す気持ちを萎えさせ、良の経験は促進させていた。

(1) 教員への魅力

〈教員への魅力〉は、教員として過ごすことの楽しさ、やりがいであった。教育実習でお世話になった先生が良かった、子どもと話すのが楽しかった、実習が良かったなど、教職を目指すことを決定した理由として教職の魅力について話す学生も多くいた。教職の魅力に気付くことで教員を志す気持ちがより一層強くなっていくようであった。

最初は(先生なんて私には)できないできないって思って。大変だなーって。たけど。だんだんだね、なんか楽しいというか…うん。すごい楽しかった。なんだろう…すごい幸せだったんだよね。子どもくるじゃん、対応で返すじゃん。いちいちそれが幸せで。あーよかったーって。(Dさん 4年生 教員)

お礼状に書いて、担当の先生にもお手紙書いて、去年の実習先の養護の先生にも手紙じゃなくてメールして。去年が実習が良すぎて、その先生に、二次(教員採用試験二次試験)まで

行ったんだからすごいよって言われて、ありがとうございます、みたいな。がんばりますみたいになったけど。(Cさん 4年生 教員)

(2) 教員としての知識・技術への自信

実習では、大学で専門的に学んできたことが現場ではどのように活かしていくことができるのか、知識・技術の不足な面はどこか等を見極める場となっている。そのため、教員としての知識・技術への自信や不安が数多く語られていた。教員を志す気持ちはあるが知識・技術の面で不安を感じた場合には、大学院進学も視野に入れはじめる学生もいた。一方で、知識・技術不足への不安が教員を志す気持ちにも影響を与え、結果として一般就職を目指す学生もいた。

救急処置も小学校だったからそんな大きい怪我もなく、こういうときはこうしたらいいんだよとか教えてくれた。思ってたよりは出来そうかなみたいな。すごい怖いイメージあったけど。けどまあ、最悪、救急車呼べばいいし、なんか、これくらいの怪我だったら出来そうかなーみたいな。あったけどね。(Aさん 4年生 民間企業等就職)

なんかちょっと勉強しなきゃとかって思って。こんなんであと1年とちょっとで教員になれるのかと思って。無理だって思って。(Jさん 4年生 大学院)

なんか看護なの？応急手当が大事だったら、私に看護のテクニックが無さ過ぎる。私に応急手当の知識とか技術とかあったら、無能っていうのなんていうの？私の不手際っていうの？未熟な所。その不足分があってまだ自信がない、って思った。(Bさん 4年生 民間企業等就職)

(3) 教育観・学校組織への適応感

〈教育観・学校組織への適応感〉では、一生涯働いていく上で自身が学校という職場に適応していけるのか、教育観は自分に合っているのかを吟味していた。学校という職場・教育観に順応した例として、実習校にもう一度戻りたい、楽しかった、先生が良かったなどの発言があった。

私、実習終わっちゃって学校(大学に戻って)来た時になんかすごいぼかーんってしちゃって。まだ学校(実習校)いたいな、って思ったね。(Dさん 4年生 教員)

一方で、以下のように学校の集団主義的な教育観に染まることに違和感を感じたり、教員間の人間性や人間関係に不安を抱き、教職を目指すことに迷いを生じさせている学生もいた。

みんなに同じことさせたり、こうしなさい、っていう。集団行動だからやっぱり…あー、これ一生こういう所にいるの無理かな？みたいな。(Aさん 4年生 民間企業等就職)

ふつうにほんとに…先生(実習先の指導教員)と合わないっていうか。合わないっていうかその先生、難しい先生で、学校中で嫌われている先生だったんですよ…わたしなんか、宜しくお願いします！っていったら。「(沈黙)」(指導教員からの返答がなかった)って感じで。あー！(もう駄目)って感じで。(Lさん 3年生 在学中)

3-4. 求職活動・雇用条件の吟味

《教育実習体験に基づく吟味》を行った後、〈教員を志す気持ち〉に戸惑いを感じている学生はさらに《求職活動・雇用条件の吟味》を行っていた。また、戸惑いがない場合でも〈教員を志す気持ち〉を確実なものにするために同様の吟味を行っていた。その吟味は〈就職活動の能否〉、〈教育公務員としての安定の魅力〉の2つの概念から構成されていた。

(1) 就職活動の能否

ある学生たちは就職活動（一般企業）に強い不安や抵抗を感じていたことがうかがえた。就職活動は、「大変」、「無理」、「苦手」、「私には根気がない」と感じ、教員採用試験の受験の困難さと比較した結果、今の自分の状況や能力に合う方（教員採用試験の受験し教員を目指す）を選んでいった。

その時は全然迷ってなくて、養護（養護教諭）しか見てなかった。私、就活が出来る根気とかもなかったと思う。(Dさん 4年生 教員)

マイナビ（就職情報サイト）とかリクナビ（就職情報サイト）とか、ES（エントリーシート）がなんちゃらとか、そういう話は聞きました。絶対無理って思ってたね。1日何社とか、エントリーシート何社出したとか、絶対無理って思いました。(Gさん 4年生 教員)

説明会めんどくさくね？っていうそんな感じですよ。めんどくさいし。もういいやーって感じですよ。もはや。ま、いつかな、いいんじゃないかなーって感じですよ。でも若干まだ受けれる公務員ないかな？って感じですよ。(Lさん 3年生 在学中)

また、就職活動を行わない理由として、周囲の状況（就職活動を行う友人）を挙げる学生もいた。

なんか周りがさ、（就職活動を）してない人多すぎたからじゃない、養護（養護教諭養成課程に所属する学生）って。周りがしない人が多いからかな、私は、流されるタイプだから。(Cさん 4年生 教員)

一方、教員採用試験が不合格であった場合に備え就職活動を併用しようとする学生や、一般企業就職できる機会は新卒の1回きりととらえ、この機会を捨てずに一般就職に挑戦しようとする学生もいた。この理由として一般就職を選択した後に再度教職を目指すことも可能であるが、教員として一度就職してしまうと、その後の一般就職は困難であることも、就職活動を行う理由として挙げていた。

やっぱりなんか保険かけたっていう子で、就活で内定もらっとけばいざというときっていうのを聞いて考えちゃって。(Kさん 3年生 教員)

あとは単純にいろんな道を経験したかったっていうのもあるかも。いま養護教諭になったとして、教員から一般職になりづらいついていうじゃん。で、大学院も考えていたんだけど。大学院、このままストレートに入ったとしたら、一般職を体験してみたかった。いろんなことを体験し

てみたかったから、欲張りで。まず、一般職にはいったら、院も教員も道もまだ残されてるじゃん。っていう風にいろんな道を残しておきたくて、えらんだのが一般職。(Bさん 4年生 民間就職)

(2) 教育公務員としての安定への魅力

以上の吟味に加え、公務員になれることも教員採用試験受験決定に至る重要な吟味事項になっていた。学生は、給料や福利厚生など学校の教員として働く上での雇用条件を一般就職と比較していた。

なんていうの？(教員は)福利厚生もちゃんとしてるしー、休みもあるしー。育休、産休もちゃんとあるしー。だから働く条件としてはベストじゃない？かつ、(教員採用試験は)就活まではいかなくても、就活ほどシビアじゃないじゃん。ちゃんと勉強して…受かるわけだから。比較したときに教採を受けるしかないなって思った。うん。(Eさん 4年生 教員)

また、教員採用試験に不合格になった場合でも、臨時採用があることへの安心感から教員を選択している学生もいた。

(臨時採用がもしもなかった時どうするか、という質問について)

ピアノ習ってるんですけど、(ピアノの)先生に資格取った方が良いんじゃないって言われて、ピアノの先生の資格みたいなのをとってあるので、もし、その時に、先生なー(臨時採用が無かった場合)て思ったら、そっち(ピアノの先生)にもいこっかなー。でもなー、給料やすいしなーっていう。でも、たぶん、90パーセントくらいの確率で、臨採になりたい、です。(Hさん 4年生 教員)

さらに一般就職を目指した場合、採用されなければ無職やニート(若年無業者)、プー太郎(フリーター)になる可能性がある。このことへの不安が臨時採用のある教員を進路決定することへの重要な要因になっていた。

(教員にならずに公務員受験をすることに決めたことについて)

それよりも勉強やばい！これ落ちたらニートだ！みたいな。(Aさん 4年生 就職)

(臨時採用の連絡がきたことについて)

そう。なんか困ってるらしくて、地方は人(教員)足りなくて。だったら(正規採用として)採れよって感じだけど。まーそれが決まれば、4月から働けるから、「プー」ではないけど…。(Cさん 4年生 教員)

就活って採用されなかったらそれで終わりじゃん。でも教採って落ちてでも臨採(教員の臨時採用)あるじゃん。なにかしら。養護じゃなくても事務とか。私さー事務仕事好きだからさー。事務でもいいし、なにかしら、関わる仕事ができる！絶対に、フリーターにはならないじゃん。それが大きかった！臨採(教員の臨時採用)がある、っていう絶対的な安心感はおおきかった。

養護（養護教諭）になる、教員になれる、っていうので。（Eさん 4年生 教員）

4. 考察

4-1. 在学中に職業選択を真剣に吟味することの意味

本研究の結果、対象学生は《教員を志す気持ち》が本当にあるのか否かという真剣な職業吟味を、教育実習をきっかけに再三にわたり行っていたことが明らかになった。上山（2009）は、自己の進路に対して否定的な考えをもつ看護学生が、実習などの実際的な体験をすることにより自分自身に関する考えを深め、看護職を目指すことを肯定するような変化もみられることから、進路変更の迷いを不適応として対応するのではなく、職業的アイデンティティ確立の途上ととらえることも必要と述べている。また、大原（2011）は、公務員志望者が民間就活を並行することが禁止ではないものの、抑制的な現状を疑問視しており、民間各業界と同じように公務員も数ある進路選択先の一つとして目指せるチャンスがある方が望ましいと述べている。学生の進路選択には多くの進路を知り、広い視野を持ちつつ迷い、葛藤することは就職後の職業間ミスマッチを減らすことにもつながると思われる。

また、これらの吟味は安易な職業選択と早期離職を防ぐためにも重要な過程だと考えられる。女子学生が志向する資格職のひとつである看護師は、その求人倍率の高さから進路選択の真剣な吟味が就職後に改めて行われる現状がある。看護学部の学生の90%以上は看護師等として一旦就職するが（公益社団法人日本看護協会、2006）、看護師の離職率は2013年の報告（公益社団法人日本看護協会、2014）によると全体では11.0%、新卒者に限ると7.9%である。病院勤務の看護師は年間4.7万人の新卒者が就職しながら、総数が2.2万人の増加に留まっている。これは、年間10万人以上が離職しているためであり、大量採用・大量退職が問題視されている（公益社団法人日本看護協会、2011）。一方、教員養成課程の卒業生の61.6%が教員として就職するが（文部科学省 高等教育局大学振興課教員養成企画室、2013）、その在職者の平均年齢は公立小学校では44歳、公立中学校44.1歳、公立高等学校45.8歳と高く、離職理由をみると、幼稚園の除く各学校種で「定年（勸奨を含む）のため」が最も多い（文部科学省 生涯学習政策局政策課調査統計企画室、2014）。この点からも教員の場合、一度就職すると離職せずに、看護師と比べても長期にわたって就業していることがわかる。教員は求人倍率が高いため、在学中に教員採用試験を受けるべきか否かという職業選択に対する真剣な吟味が行われており、このことが就職後の職業間ミスマッチを防いでいる可能性も示唆される。

4-2. 教員を志す気持ちを確かなものにするための意味

本研究では《教員を志す気持ち》を確かなものにするために、教育実習を通して教員への魅力、知識・技術への自信、教育観・学校組織への適応について吟味を行い、自身の職業への適性を検討していたことが明らかになった。この検討は理想と現実のギャップを受け入れるための必要な過程であった。松下ら（1993）も看護学生は看護についての学習が進むと、思い描いていたものと現実との差や自己の適性などに対する困惑や迷いが生じる、と述べている。しかし、鈴木ら（2011）は、教員志望度の高い人は教員の大変さ忙しさについて強く認識していると報告しており、田部井ら（1987）は、家庭科生は教育実習を通して教職に肯定的意識をもった学生は卒業後に教職につく傾向がみられたと述べている。教員への魅力、知識・技術への自信、教育観・学校組織への

適応について吟味することは、現実と理想のギャップを受け入れているためにも重要な過程であると推察できる。

4-3. 教員養成系の学生は一般就職を目指してはいけないのか

また本研究では、就職活動と教員採用試験受験を比較し、自分にとって現実可能性の高い方を選択していた。就職活動は自分にはできないと判断し教職を目指す学生がいる一方で、一般企業への就職は今しかできない、と一般就職を考える学生がいた。森岡（2011）は、新卒として有利な求職状況を確保するために、意図的に単位を落としたり、就職留年を行ったりする学生もいると述べており、日本では新卒であることは求職者にとって最高の「売り」である。大学生にとって新卒として就職活動を行うことは、より良い条件で就職を探すことのできる機会であり、既卒者にも同等の就職機会がある教職は新卒を生かして一般企業への就職を目指した後の選択になりうる。そのため、本研究でも一般企業への就職をした後、再び教員として働くことを視野にいれている学生もいた。各都道府県・指定都市教育委員会では、多様なバックグラウンドを持った優れた人材の確保を積極的に行っており（文部科学省 初等中等教育局教職員課、2008）、経験を積んだ既卒者は逆に優遇される立場にある。例としてさいたま市では、教員採用選考試験に民間企業又は官公庁等で正社員又は正職員として通産3年以上の勤務経験を有する方を対象とする社会人特別選考などの選考区分がある（さいたま市教育委員会、2014）。田部井ら（1987）も、企業等に就職した後に教職の意義を再認識して教職を志望する者もおり、これらの社会人を対象にした再教育の機会を大学教育で検討することも必要だろうと述べている。このことから教員養成系の大学の学生が一般就職を目指す場合、教員を志す気持ちが残っているのであれば、それは未来の教員への就職機会に有利に働く場合があるといえる。

4-4. 女子学生特有の職業選択理由とは

また、女子学生としての職業選択という視点で検討してみると、本研究対象者の16名すべてが結婚を将来の選択肢として教職と同等に検討していなかった。15～39歳の独身女性間では3人に1人が専業主婦志望という報告（厚生労働省、2013）があり、20歳代の女性を中心に「専業主婦願望」が広がっている（プレジデントオンライン、2009）という記事まで掲載されるようになった。その背景には、男女雇用機会均等法施行後20年以上たっても一向に改善されない女性たちの働く環境への絶望と、理想の「働く女性のモデル」の欠如があるのではと述べられている。教職は女性にとって結婚・出産後も働きやすく、他の公務員、民間と比較すると女性の管理職も多く排出している（ネクストドア、2003）。女性にとって産休・育休がとれることは人生設計において重要と評価し、教職選択の重要な要因でもあった。

以上を踏まえると、職業選択に至るまでの様々な葛藤と吟味は決して無用なものではなく、教職を選択するにせよ一般就職を選択するにせよ、その選択に納得と確信を得るために重要な段階であることが示唆された。

4-5. 本研究の限界と今後の研究

本研究はある教員養成学部的女子学生16名が対象であり、教員を目指す他の学部の学生については新たに検討が必要である。また、専攻する教職の種類をみると養護教諭が多く、一般教員の割合が少ない。本研究では教職の種類によって発言内容に大きな違いは見られなかったが、養護

教諭も一般教員も職業選択に関して同様の過程を経るのかについても今後の検討事項である。

また、教職を目指す学生の進路選択における大きな岐路として、教員採用試験受験決定時点と、教員採用試験結果判明後があった。本研究では後者は未検討であるものの、新たに様々な葛藤や決断があることが本研究の調査結果からも見えてきている。今後は、教員採用試験後の臨時採用を選択する学生のさらなる進路葛藤について研究していくことが課題である。

謝辞

本調査にご協力いただきました学生のみなさんに心より感謝申し上げます。

引用文献

- 妹尾渉, 松繁寿和, 梅崎修 (2003) 「公務員および教員の男女間賃金格差—大卒者アンケート調査から」『大阪大学経済学』53, pp.96-108.
- 上山和子 (2009) 「看護学生の進路選択要因が職業的アイデンティティ形成に及ぼす影響とその対処法」『インターナショナルNursing Care Research』8, pp.113-122.
- 大原瞳 (2011) 「公務員試験のカラクリ」東京, 光文社.
- 河合塾 (2010) 「第3回全統マーク模試からみた受験生の志望動向 2010/12/7・2011年度入試動向・理系学部と資格系学部の人気鮮明」<http://www.kawaijuku.jp/news/data/20101207.pdf> (アクセス日2015年3月18日)
- 木下康仁 (2007a) 「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法」『富山大学看護学会誌』6, pp.1-10.
- 木下康仁 (2007b) 「ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて」東京, 弘文堂.
- 公益社団法人日本看護協会 (2006) 「今後求められる看護師の資質と教育—20年後の看護職確保の観点から—」<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/05/dl/s0526-2e.pdf> (アクセス日2015年3月16日)
- 公益社団法人日本看護協会 (2011) 「日本の医療を救え—看護職の健康と安全を守ることが患者の健康と安全を守る—」<http://www.nurse.or.jp/nursing/practice/shuroanzen/jikan/pdf/sukue.pdf> (アクセス日2015年3月16日)
- 公益社団法人日本看護協会 (2014) 「2013年病院における看護職員需給状況調査」協会ニュース2014年3月号 <http://www.nurse.or.jp/home/opinion/news/2014/03-02.html> (アクセス日2015年3月24日)
- 厚生労働省 (2013) 「若者の意識をさぐる」『平成25年版厚生労働白書』pp.2-36.
- さいたま市教育委員会 (2015) 「平成27年度さいたま市立小・中学校等教員採用選考試験実施要項」http://www.city.saitama.jp/006/001/001/002/p001506_d/fil/H27.pdf (アクセス日2015年3月24日)
- 鈴木悠介, 續木智彦, 藤田圭一 (2011) 「教職課程履修者が描く教師像と教育実習の捉え方について—学部3年生を対象に—」『日本体育大学紀要』41, pp.59-64.
- 田部井恵美子, 池崎喜美恵, 武井洋子 (1987) 「教員養成大学家庭科生の職業選択に関する意識 (第2報)」『日本家庭科教育会誌』41, pp.71-76.
- 日本経済新聞出版社 (2014) 「知って得する入試とお金の最新情報Q & A 受験から就職まで親と子のかしこい大学選び」pp.82-83.
- ネクストドア (2003) 「小学校の先生になろう」東京, オーエス出版社.
- プレジデントオンライン (2009) 『なぜ、20代高学歴女子は「専業主婦」狙いなのか』<http://president.jp/articles/-/13> (アクセス日2015年3月13日)
- 松下由美子, 木村周 (1993) 「看護学生の職業的同一性形成を規定する要因の検討」『教育 相談研究』

31, pp. 33-34.

森岡考二 (2011) 「就職とは何か—まともな働き方の条件—」東京, 岩波新書.

文部科学省 初等中等教育局教職員課 (2008) 「教員採用等の改善に関わる取組事例」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/08011112.htm (アクセス日2015年3月16日)

文部科学省 (2010a) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」東京, 株式会社ぎょうせい.

文部科学省 (2010b) 「第一部スポーツ立国の実現・教育と職業 特集2 教育と職業」『文部科学白書』pp.73-83.

文部科学省 初等中等教育局教職員課専門官 (2011) 「公立学校教員採用選考・平成23年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1314470.htm (アクセス日2015年3月16日)

文部科学省 高等教育局大学振興課教員養成企画室 (2013) 「国立の教員養成大学・学部 (教員養成課程) 等の平成24年3月卒業者の就職状況について」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/01/_icsFiles/afieldfile/2013/01/24/1330289_1.pdf (アクセス日2015年3月16日)

文部科学省 生涯学習政策局政策課調査統計企画室 (2014) 「平成25年度学校教員統計調査 (中間報告) の結果概要」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2014/08/04/1349039_3.pdf (アクセス日2015年3月16日)

(2015年3月26日提出)

(2015年6月3日受理)